

第二期 第一〇六号 (初版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2025. 05. 10 定有堂書店 発行

本を拾う

推しの思想家や哲学者はいますか

春過ぎて

また一年が過ぎた日記

文学における恐怖演出に関する考察

作者の見えざる手

日々是雑言(ぞつごん) 4

MONEY! MONEY!

本を作る側から (26)

意識されない欲望

汽車に乗って

内坪井町日記 (12)

『白夜』の『ファースト・キス』

花

案内

編集後記

奈良 敏行

岩田 直樹

白井 明大

鳥居 貴彦

板野 田香

おぎはらきえ

萩原 俊郎

高木 善祥

村瀬 謙介

古賀 啓三

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

ドラメリア

本を拾う

奈良 敏行

(定有堂 主人)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」(二〇二五年四月十七日)は、前回の復習を兼ねて船木亨『ドウルーズ』と宇野邦一『ドウルーズ 流動の哲学』を取り上げた。報告者はイラスト構成のレジユメをA4十枚も用意した。精緻な報告で大学のゼミのようだった。楽しかった。

わたしはこのところ「ノマド」と「平滑空間」「条理空間」という概念に興味がある。ノマドは遊牧民だが、本来はギリシャ語のノモス(境界のない空間)に由来するらしい。存在の一義性はこのノモスの中にある。

《自己の所属する集団や、国家や、歴史などとして、くり返しもどってくる同じ表象や同じ境界をどこまでもしりぞけ、別の運動や触発や関係の中に、思考と行為を解き放つことを目指しているのだ。》(『流動の哲学』)

これはノモスや「平滑空間」のことを語っている。「平滑空間」とは触覚的手による接触の空間、微細な接触行為の空間であり区画された「条理空間」と区別される。

最近、チョン・ジへ『私的な書店』を読んだ。小さな本屋、手のひらサイズの本屋論として完成度の高いものだ。その理由は次の一文にある。

『日本の書店員たちの話を収録した』『本屋』は死なない』は、私のバイブルでした。』

石橋毅史さんの著書だ。この本を起点として、ほとんどの日本の本屋事情と同期しているのに驚いた。日本の小さな本屋は『就職しないで生きるとは』を底色音としている。そこに同根のつながりを感じた。「私的な本屋」は、「新たな起業というよりも、自分のためだけのオーダーメイドの職業をつくり出したのです。」と明かす。小さな本屋のベクトルの方向を共有した言葉だと思う。

この本に惹かれたのは目次に「『私的な書店』は本屋ですか？相談室ですか？」とあったからだ。突き詰めたところで、本へのアドバイスをビジネス化したのだ。それが相談室だ。本屋という仕事を自分の身の丈にカスタマイズしていく成功体験がここにある。この整理整頓に「条理空間」を感じた。

『韓国の「街の本屋」の生存探求』という本もある。この本も見事な街の本屋論だ。次のように語るが、これは日本の本屋の現場と地続きだ。

『私たちは、ただ品物を買うのではない。空間の雰囲気

味わい、購入までのプロセスなど一連の行為を楽しむ。デジタル時代になったからこそ、読者は街の本屋を再発見したのだ。』

『街の本屋で本を買う』のは「自分のカッコよさを示す」ことだ。』

この二つの韓国の本屋論には、街の本屋の再発見と希望が考え尽くされている。これらのベクトルの方向に「条理空間」を感じる。それはもちろん悪いことではない。でも、何かしら同じような物語が反復されているような気がする。きつとたくさんの情報を圧縮しているからだと思う。

ところで、『世界への信頼と希望、そして愛』（みすず書房）というアーレント論を書いた林地大地さんが、平滑空間である『本屋のパンセ』『町の本屋という物語』の書評を、「言葉と論理が挫折するところ」というタイトルで書いてくださったのに驚いた。ノマドへの逸脱だからだ。でも、古本屋の山本善行さんと親しくしていると知って、少し理解するところがあった。

『漱石全集を買った日』を読んだ。山本善行さんと常連客の清水裕也さんとの対談本だ。そして清水さんが購入した数年分の本が、順を追って棚に並び、その写真も登場する。二人の会話の中に、「本を拾う」という言葉が出てくる。店の外の百円均一コーナーで良書を発掘することだ。

お客である清水さんは言う。

「まったく知らない詩人でしたが、帯の推薦文が詩人の杉山平一さんと、略歴を見ると「ボン書店」の鳥羽馨とも親交があり、ボン書店から出ていた雑誌『マダム・ブランシュ』にも寄稿していた、と。……これで均一台に出ているのだから、買わない理由がない。」

こういう本を拾うくり返しの中で山本さんや清水さんは蒐書していく。圧倒的な知識に驚かされる。

古本屋の本は長く売れないと均一本となる。そしてその先は廃棄される。ふと記憶に甦るものがあったて、井狩春男さんの『返品のない月曜日』を読み返した。「捨ててある古本の話」というエッセイがあった。紐で縛ってシャッターの前に本が置いてあるのだ。

「こうも考えた。遠くから買いに来てくれた客に対して、時間で店を閉めてしまつて申し訳ない。今日の所はこの中から、好きなものを持っていって、それでかんばんしておくれ、と言う意味かも知れないと。神田は “いき” な街である。」

新刊にこだわる限り本屋は「条理空間」に閉ざされ、古本屋の流動性に着眼すれば「平滑空間」になる。

「本を拾う」とは魅力的な言葉だ。

2025. 04. 21

(参考)

船木亨 『ドウルーズ 新装版』 清水書院 2016

チョン・ジヘ 『私的な書店』 葉々社 2024

宇野邦一 『ドウルーズ流動の哲学 増補改訂』 講談社学術文庫

2020

石橋毅史 『「本屋」は死なない』 新潮社 2011

レーモンド・マンガロー 『就職しないで生きるには』 晶文社 1998

ハン・ミファ・渡辺麻土香・石橋毅史 『韓国の「街の本屋」の生存探究』 クオーン 2022

林大地 『世界への信頼と希望、そして愛 アーレント『活動的生』から考える』 みず書房 2023

奈良敏行・三砂慶明編 『町の本屋という物語』 作品社 2024

奈良敏行・三砂慶明編 『本屋のパンセ』 作品社 2025

山本善行・清水裕也 『漱石全集を買った日』 夏葉社 2019

井狩春男 『返品のない月曜日』 筑摩書房 1985

奈良敏行十三砂慶明編

『本屋のパンセ』 作品社

二〇二五年三月五日刊行

『本屋のパンセ』 作品社

二〇二五年三月五日刊行



# 推しの思想家や哲学者はいますか

岩田 直樹

〈再解釈本舗・「読む会」講師〉

「推し」という概念がよく理解できない。「推」という語が入っているから、てっきり「誰かに何かを薦めること」だと思っていた。しかし、自分だけの推しから特定のコミュニティによる推しまで、推し形態の様相は実に幅広い。対象は過去の人やモノだけでなく、リアルタイムで伴走している人やモノ、未来のまだ見ぬ人やモノまでも含むのか。「好み」とか「趣味」と言ってしまうてもよいのか。そもそも「概念」について語ることで自体が間違いなのか。

そんなことを考えたのは、四月一五日の「読む会」(第二期第三一四回、通算四二九回)で、伊藤直『戦後フランス思想―サルトル、カミュからバタイユまで―』(中公新書、二〇二四年)について参加者があるでもないこうでもないときと会話をしていたときである。私にとって、推しの思想家・哲学者は誰なのか。「読む会」が終わっての帰途、車を運転しながら、記憶を掘り起こしてみる。

著作集を全巻購入してぎつと目を通したのは廣松渉、丸山眞男だ。みずず書房から刊行されたメルロー・ポンティの著作はすべて読んだ。フッサール、ベルクソン、アーレント、ドゥルーズらの主要著作は読んだはずである。実に残念なのは、それらの思想・哲学の生成変化をリアルタイムで体験することができなかったことだ。

思想・哲学から文学を対象を広げると、ただ一人、私より八歳年上のカズオ・イシグロの著作は、日本語版が刊行されるとすぐに読んできた。『私たちの遠い夏』(一九八四年、文庫化の際に『遠い山なみの光』と改題)から『クララとお日さま』(二〇二一年)まで長編と短編集を合わせて九作品。いずれも味わい深い。『日の名残り』(一九九〇年)と『私を離さないで』(二〇〇六年)は突出していると思う。作品とともに年齢を重ねていく貴重な感覚は、「推し活」をしている人たちに共通しているのかもしれない。

ここまでは、帰りの三〇分ほど、車の中で頭の中に浮かんできたことだ。

「読む会」の後、風邪で体調を崩し、二日間寝込んでいた。再び推しについて思いをめぐらしたのは、ちょうど一週間後、やはり車の中だった。往復三時間強(職

場発着)の帯同者のいない県外出張があり、運転操作以外は音楽やラジオを聴くことくらいしかない。

最近、ほとんど本屋さんに行くことがなくなつた。新刊は新聞広告で知るだけになつた。私は、祖父の代から(百年近く?)配達されている全国紙と地方紙の二つを受動的に読んでいるに過ぎないが、情報源としては優れたツールであることは間違いない。速報性に劣る新聞を読まない人が激増しているのは仕方ないとしても、どこから新刊の情報を得るのだろうか。

そう言えば、こんなことがあつた。三月下旬のある日の夕刻、仕事から帰る途中でATMに寄つたついでに、すぐ近くの本屋さんに行つてみた。仕事を立て込んでいて、新聞も斜め読みがやつとで広告欄に目を通していかなかった。たいして期待もせずに、店内を早歩きで巡る。もう暗いから早く帰ろう、と思つてふと新刊の棚を見る。

「ああ、ついに出たんだ!」定有堂書店が閉店して以来、久しく忘れていたこの感覚。本屋さんでしか味わうことのできない独特の喜び。

「読む会」でも何度か話題に出した幻の名著が、ついに文庫版で刊行されたのである。木田元『メルロ』

ポンティイの思想』である。原著は岩波書店から一九八四年に刊行された(三四〇〇円、四七八頁)。

三月一三日刊行の講談社学術文庫は、五九二頁、二五三〇円。講談社選書メチエの価格と変わらず、とうてい文庫の値段ではない。学生の私はこの本でメルロ●ポンティイを勉強した。みずず書房版を読んでわからなくなるたびに、この本の該当箇所を、ボールペンで線を引きながら何度も読み返した。

廣松の主著『世界の共同主観的存在構造』(原著、勁草書房、一九七二年)が岩波文庫に入ったとき(二〇一七年)、「ついに廣松哲学も古典になつたか」と喜んだものの、今回のような驚きは一切なかった。

そうだったのか、私の推しは、この四〇年間、ずつとメルロ●ポンティイだったのかもしれない。そう結論づけたとき、職場が近づいてきた。

『戦後フランス思想』ではメルロ●ポンティイの扱いが軽い。身体図式、間身体性、内部存在論(非哲学)などについて、若手研究者が二一世紀の新しい視点から論じてくれないだろうか。できれば新書で。

## 春過ぎて

白井明大

(詩人)

去年の暮れからこの春までの記憶がすこんと抜けているように感じられてしまうのも、あわただしい日々のおかげで、一つひとつ手にとって確かめるように十二月、一月、二月……とふり返れば記憶を呼び起こすことはむずかしくなぞそうにも思えるけれど、まだふり返っている余裕がなく、数か月まえのこともぼんやりとした霧の中に包まれておぼつかない。

霧。

なぜか霧が出てきて、物語はまた思わぬ情景の中に入り込んでしまった。それをたどると足どりで追うようにして物語の霧の中をさまよう時間がけつきよく一年近くつづいた。

霧が漂う世界を書こうというつもりはなかった。つもりもなく、ひとつのもの、ひとつの言葉に傾いていくことはふしぎでなく、詩を一冊の詩集に編んでみると、なぜか指

先が、(ベランダ)が、たびたび出てきて、ああ、この詩集はそんな言葉を、ものをめぐってうまれましたのかもしれないと、できあがって離れてみて初めて気づくこともある。

それが霧だった、といえるほどまだ書きあげたばかりで離れられてもなくて、ただぼうつとしている。ぼうつと熱に浮かされたように製本前の印刷一部抜きを送ってもらい、表紙、扉、本文のそれぞれを紙片として、紙束として手にし、厚みや手ざわり、重みを感じ、それもまた霧ではないけれど、それそのものにはまだ焦点を合わせられないような夢うつつきでいて醒めない。

装丁案を目にした時点で、背がぶ厚いとわかった。

一話めは九十ページほどで、今回二話めがその三倍ほどの長さの話になったから、書いている時点で厚さも三倍になるとわかりそうなものなのに、頭で描くのと実際に背を目にするのでは違ったのは、それが本棚に現にならんでいる本と比較してどれほどの厚さなのかを把握できたからだと思う。

川と鳥と光に誘われるように、この物語を書きはじめてのがひとつめの話だったとすれば、ではもしかしたら霧がこのふたつめの話の、とらえどころのない舞台の役割を果たしていると言えそうな気がしているけれど、それは勘違

いかもしれない。

しよせんは言葉の手綱を握ることのできない、言葉が駆けまわりたくなつたら引きずられていき、転がり落ちていったら同じ勢いで落ちていくほかないような、ふりまわされてばかりの葉っぱのような身なのだから、こんなふうな佇まいの本にしたいな、など書きはじめたときにあつた願いは抵抗もできずにしぼんで消えて、いつたいこれは何というかたまりの姿で現われたものを、喜んでうけいれるしかできたためしがないし、詩でもそのようなのに物語などといえばなおさら。

何日も何日も家から一步も出ずにいることに慣れて十年余りになるんじゃないか。その慣れた暮らしがまた一年積み重なった末に、難産してうまれた本ならできあがっただけありがたいと思う。

そんなふうにつつかりと亀にのつて帰ってきた人のようにおぼろな数か月をせめて日常身近なことから思い出そうとすれば、音楽は何を聴いていただろうか。ニール・ヤングを秋には聴いていたと思う。聴きすぎてさすがに気の済んだところまで来て、春にはあまりレコードをかけなくなっていた。ほかには何を聴いていたろう。

たくさんさんのものを置いてきたような気がする。

たくさん置き忘れたままになっている気がする。

そんなふうにしかもを書けないのが相変わらずで。街に出るたびひさしぶりで。置いてきぼりの時間がもう霧の中と変わらないのかももしれない。

それにしても森の生活者の窓辺から眺めた、ようやく校了できてほつとした日の午後の桜はよかった。葉が混じりはじめたあの桜も、桜あんのベージュも、コーヒーマ、あのひとときは四月の八日、九日、そのあたりだった夕方、ゆっくりと時が流れていたんじゃないか。

あれは記憶に残っていくような気がする。花見のひとつもせずに過ぎた春の中で、あれは。いつかなにか詩にできたらいいかもしれないとふと思った。

(参考・編集部)

白井明大 『日本の憲法 最初の話』 KADOKAWA 2023

白井明大 『着雪する小葉となつて』 思潮社 2021

白井明大 『一日の言葉 一生の言葉 旧暦でめぐる美しい日本

語』 草思社 2018

白井明大 『生きようと生きるのほうへ』 思潮社 2015

## また一年が過ぎた日記

鳥居 貴彦

(開風社待賢フックセンター)

今年の桜は少し遅かった。三月の終わり、沖繩からやってきた家族と計画していた花見はあまりに寒いのでやめた。かわりに琵琶湖を見に行ったのだがそこでもやっぱり風は冷たく早々に引き上げた。

四月、ようやく満開になった桜とそれを見上げるひとたちを横目に三重にクルマを走らせる。三重の桜は静かにポツンと、誰かに見られるためではなくしつかりと咲き誇っていた。とても贅沢だと思った。潮干狩りにはまだ早く、海の家のおばあさんは「今日は潮も引き切らんし、風も冷たいねえ」と言った。

七年前、生まれて三、四日しかたっていない息子がはじめて病室から出たのもこんなふうにまぶしい季節だった。腕の中で日差しに目をしかめる息子を見て、このあたたか

い太陽の光すらもこの子にとっては凶器になるのではないかと怖かったことを覚えている。三千グラムちょっとはつきりと目も開いていない、まだ何者でもないふやふやとやわらかいかたまり。でもまぶしいものにはまぶしそうにする、ちいさな意思を持ったひと。あのとき彼には世界はどう見えていたのだろうか。

三十歳ではじめた本屋は、この春で六年がすぎた。どこに向かっているのか、どこからきたのか、まるでわからない。わからなくなってきたのかもしれない。わからうとしなくていいということにやっとなつてきたのかもしれない。わからないまま七年目に入ろうとしている。

向かいのおじいちゃんが玄関口で配達の人と話している。「これはなんなの」「これお弁当なので召し上がってくださいね」「配達人の口調はやさしいがどこかぶっきらぼうだ。」「この容器はどうするの」「それは夕食のですから、別の業者がひき取りに来ますからね」同じ会話をお昼前と夕方、毎日二回必ずしている。「ああそうですか」と弁当を受け取るが、翌日にはまた同じ質問をする。サービスを



受ける人、する人、それらを依頼した人。ちぐはぐなまま毎日いろんなひとが出たり入ったりする。どこかで誰かがボタンを掛け違ってしまったのだろうか。介護の世界に正解はない。おじいちゃんは今日もよくわからないお弁当をよくわからないまま受け取っている。そしてうちの子どもを見ては「大きくなったねえ」と毎日驚いている。

本屋の出窓で写真の展示がはじまった。あきこさんが写真を展示したいという。あきこさんとはちようど一年前に知り合っただった。よくわからないまま訪れた東北の地で、よくわからないまま話をして、よくわからないまま京都でまた会った。なぜここで展示をしたいのだろうか。聞けばいいのだろうか、よくわからないままの方がいいと思った。それは老いなのだと思う。よくわからないことをわからうとするのではなく、よくわからないままにしてみる。ひとがやるというのだからそれでいいのかもしれない。やつと六年がたったばかりのこの店は、もう老いはじめている。それがちよつとうれしい。

出窓に並んだ写真は、あきこさんのおじいさんの部屋を撮ったものだという。部屋の主人が亡くなった後の、呆然

とした景色。撮るひともし呆然としていたのだろう。がらんとした空間をぶつんと切り取ったような写真。いるといないの間には、どっちでもない時間があったほうがいい。二人の間に呆然とする時間があつてよかつたなと思う。もうこの世にいないおじいさんは、遠く京都の本屋の出窓に自分の部屋の写真が並ぶことをどう思うのだろうか。

Asako Ogawa Window Exhibition  
"stare into a room"

二〇二五年四月十二日(土)・六月七日(土)  
開風社 待賢ブックセンターの出窓にて

「開風社 待賢ブックセンター」

京都市上京区大宮通榎木町上る菱屋町818

## 文学における恐怖演出に関する考察

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)

突然だが、私はホラー作品が好きだ。良質なホラー作品を見た（読んだ）時の、あの胸のザワザワする感じ、妙な余韻や背徳感が好きなのだろう。そんな訳で、「自分でもホラー小説を書いてみよう」と思い立った。

まず、恐怖の構造を明らかにする必要がある。一概にホラー作品と言っても、怪談や心霊、ヒトコワ、スプラッター系など色々な種類が存在する。どれが怖いと感じるか？

イメージしやすいホラー映画を題材に考えてみる。ヒトコワ系も割と好きだが、最終的に整合性が取れてしまつてはあまり怖くないし、スプラッターも人体の中身が漏れ出るだけなので、見慣れてしまつとつまらない。知人にお勧めされた「テリファー」も、ふーん、という感想だったし、「SAW」はもはやアミューズメントパークである（それはそれで楽しいが）。だからスプラッターもなし。

実際に怖いと感じた映画を挙げてみる。一つはチェコの映像作家、ヤン・シュヴァンクマイエルの「アリス」。

不思議の国のアリスを題材にしたストップモーション・アニメで、兎の目がガン決まっている事を除けば、れっきとしたファンタジー作品だ。しかし、映画の中には十分すぎる不安定要素が存在する。例えば、キャラクターが画面左に捌けたかと思えば右の扉から入ってくるというような法則性の欠如。また、実在の空間に、敢えて奥行きのないハリポテ（2D）を置くことにより、観客に見えてない部分を意識させ、ついには空間認識さえ歪めてしまうような表現方法。しかし、これらは視覚的要素に依存した技巧であるため、小説への落とし込みは難しいであろう。

他には最近ハマって見始めているのだが、アルフレッド・ヒッチコックの映画術は転用できないだろうか？

ヒッチコックの作品には、多様なメタファー、観客を映画の世界に引きずり込むような、心理的映像技巧が存在する。一例を挙げると、扉を開けるシーンは見せるが、閉めるシーンは見せないという点。詳しく言うところ、扉を閉める際は、扉が閉まる影と音だけを映像に残すことにより、観客も一緒にその空間に閉じ込めてしまおう、という心理誘導が行われている。また、不安定なカメラワークを施すことで、視点の揺らぎ（めまい）や恐怖を視覚的に表現するなど、意外にもロジックに沿って構成されているのだ。

法則性があるとするならば、どうにかこれらを言語化、

若しくは新規的な技巧として文学にも流用できないか？

新たにヒッチコックの定本を購入し、試行錯誤してはみたのだが、結局のところ、革新的な表現技巧は獲得できず、表現方法も幾度となく使い回されたオノマトペや、文のリズム操作に留まり、へんない小説になってしまった（『硝子の魚』 潜水綴／第一章 或る男と硝子の魚 該当）。

\*

何故上手くいかなかったのか。そもそも映画と文学では恐怖の「生成装置」が異なるのだ。

まず映画は映像や音といった、知覚に直結する表現を武器にしている。ジャンプスクエアや画面の暗転、不穏な音響——そうした要素は脳にダイレクトに伝わり、表現したと同時に観客に恐怖を提供することが出来る。つまりは、外部的な刺激を発火点とし、かつ即時性のある生成装置が、ホラー映画には含まれている。

対して、文学が提供するものは文字と想像力である。しかも、小説は読まれなければ意味を持たないし、読むペーソスも読者に依存するので「恐怖のタイミング」を操作するのも難しい。ましてや恐怖対象を悠長に語っているのは、場合によっては怖さを半減させてしまいかねない。文脈のリズム・語り過ぎない事による想像性も、恐怖に関わる重要な要素であるからだ。文学で恐怖を与えるならば、読者の

中から湧き出る、遅効性の装置を活かす必要がある。

「ものいふ髑髏」という夢枕獏の短編集がある。中でも「びくいしとい」という話は怖くて鳥肌ものであった。

ひとりの男性の視点を介し話が進んでいくのであるが、どうやら彼女は殺されてしまっているようなのだ。しかし、どうも読みにくさがある。一通り読んだ所でその仕掛けに氣付く。タイトルを逆から読むと……。今度は其れに習い「文末から」一行ずつ読み進めていく。すると、今までフィリター掛って見えていた情景が一気に鮮明になり、女性が殺されて徐々に死後硬直が始まっていく過程が嫌な程リアルな映像となって脳裏に焼き付くのである。この恐怖演出は「読者ら自らにフィリター（読みにくさ）をかけさせる」という仕掛けにより、鮮やかに機能している。

つまりホラー小説では、恐怖の「描写」よりも、恐怖を「想起させる仕掛け」が重要なのだ。

そうとなれば、またホラー小説にチャレンジしてみようか。そういえば、BRUTUS「もつと怖いもの見たさ。」の袋綴じ、「破る」という行為が一役買って良かったな。今度の書下ろしは破りまくる小説にしようか……（迷案）

## 作者の見えざる手

おぎはら きえ

(蔭山)

どとぶとした瞬間に「『月収』って…」と思いついては延々と同じことを考えてしまうので、これは内容も確かめて決着させねばなるまいとついに読んでみた。

『月収』は、年金暮らしの六十代から、デイトクラブで働く二十代まで色々な年齢と立場と月収額の女性たちが主人公の六篇の短編小説集である。それぞれの立場、境遇からお金どう稼ぐのか、何のために稼ぐのかが描かれている。

ある一編の主人公は売れない小説家で、生活のために派遣社員として働いているが執筆に専念するため雇用労働ではない固定収入を作ろうと不動産投資に手を出す。

また別の一編の会社員の主人公は、やりがいを持って仕事をしながらも、親の介護を見越してその費用を確保するためNISAを利用することを決意。投資資金を確保するため週末のささやかな楽しみを外食を止め、一人暮らしのアパートから男性社員しかいない独身寮へ家賃が安いからという理由で引越す、あの手この手どことん支出を切り詰める。

主人公たちは自分で道を切り拓いてお金を、あるいはお金では手に入らないものを得ていく。

話は変わるが、三月の定有堂教室「読書室レポート」では上島菜緒著『イグアナの花園』（集英社）を読んだ。子どもの頃から人付き合いが苦手な友だちが作れず、むし

月収。

その簡潔ながら侘しきただようタイトル。マッキー細字で手書きしたような文字。まんまるの目になりんごほっぺの女性とその周りを舞うお札と葉っぱのイラスト。今年の二月に刊行された原田ひ香の小説『月収』（中央公論新社）の表紙を見たときの衝撃が忘れられない。表紙の幼い印象と『月収』という殺伐としたタイトルのギャップ。「売る気あるんだらうか」「三千元の使い方」がヒットして地位は確立できてくるからいいんだらうか」などと私の脳内で邪推が繰り広げられた。

太宰治『斜陽』、川端康成『雪国』、坂口安吾『白痴』、大岡昇平『野火』、二文字熟語の小説タイトルは数多あれど、しかし『月収』って…。同著者の『三千元の使い方』はいいタイトルだと思う。「あなたはどう使う？」という読者への問いかけも感じられる（読んでないけど）。な

る蛇などの動物と親しむ主人公が、生物学専門の大学教授にイグアナの飼育を託されたことから、彼女（イグアナ）と共に生活し心通わせ、時には叱咤されながら成長していく物語である。

『月収』も『イグアナの花園』も、いわゆるエンターテインメント小説にジャンル分けされると思うが、私はこの分野の良い読者とは言い難い。珍しくこの手のジャンルを続けて読んだが、それぞれ読み終わって頭がくらくらした。両作とも主人公の人生の制約になるもの重荷になるものは主人公の力によってというより著者の手でバツバツサと省かれてハッピーエンドを迎えているように感じたからだ。松本清張を読んでみたまえよ。『或る「小倉日記」伝』なんてどうだ。日記が散逸してしまっているためにベールに包まれている森鷗外の小倉在住時代を、身体が不自由で孤独な青年が「一生これと取りくむのだ」と決意し追究。調査・資料収集に打ち込むも、恋に敗れ、貧困にあえぎ、体は弱り、最後は…、ぜひ読んでみてください。

『喪失』なんてのもあるぞ。勤め先が倒産し失職した女性性が銀行の集金人によつと職を得るも、集金件数が多く毎日疲労困憊。しかし新規の契約もとつてこないといつ臆首されるかわからず、営業成績優秀な男性外交員が下心ありありで融通してくれる新規契約に煩悶しながらもすがって

しまう。さらに彼女には不義の恋人がおり、この男は生活の援助どころか新規契約の紹介も全く期待できない上に嫉妬と監視はしつかりしてきて彼女をますます苦しめる。生活と愛にゆれる主人公の行く末は…、ぜひ読んでみてください。新潮文庫の松本清張『傑作短編集（一）』或る「小倉日記」伝』に収録されています。

このように松本清張の小説は「この人、何も悪いことしてないのになあ…」という主人公も全く報われない、救われない。なのにならと間が差しちやつた人、欲を出した人なんて、何をか言わんや。

しかし、物価は高くなる、格差は広がるこのご時世、そんな小説を読んでも気が滅入るだけだろう。難しく考えたり過剰に心配して萎縮しているよりも、ちよつと踏み出してみたら案外良い方向に人生が変わっていくのかもしれない。『月収』や『イグアナの花園』はそう背中を押してくれる、とも読める。

（著作）

おぎはらきえ『迷妄象昧』 蔭山 2025

## 日々是雜言（ぞうごん） 4

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

「もしリン」って何？

『ヤマトならコロンバス』で知られる米国の作家、フィリップ・ロスに『プロット・アゲインスト・アメリカ』（集英社刊）という小説がある。

少し前、「もしトラ」（もしトランプが大統領に返り咲いたら）という言葉が流行ったが、この小説は「もしリン」（もしリンドバークがルーズベルトを破って大統領になっていたら）という架空の世界をモチーフにしている。

今でこそ、米国はヒットラーや日本の軍部をやっつけて世界に自由と民主主義をもたらした「解放者」みたいに思われているが、実は全く違う。

1930〜40年代の米国は金融恐慌の痛手もあって

「アメリカ第一主義、孤立主義」が台頭、自国を守るため極端な高関税をかけたというから、どこかで聞いた話だ。国内ではナチスもどきの極右政党も現れた。

ヨーロッパはほとんどナチスに占領され、「このままでは英国も」とチャーチルから悲痛なSOSが当時のルーズベルト大統領に届いていた。中国の蒋介石からも「対日の支援強化を」と泣きつかれたが、当のルーズベルトは「アメリカ第一主義」に阻まれ、身動きが取れなかった。

それどころか「アメリカ第一主義」の勢力は、次期大統領選でルーズベルトを落とすため、大西洋単独横断飛行で国民的ヒーローになったチャールズ・リンドバークを担ぎ出そうとしていた。出れば当選確実。

ロス的小説は、そうした史実をベースにしている。

リンドバーク、やばい

「翼よ、あれがパリの灯だ」で有名なリンドバークは、日本ではバンド名になったり（笑）「金髪で背の高い米国の好青年」というプラス・イメージがあるが、実はヒットラーを尊敬し、何度もベルリンを訪れていた親ナチス、反ユダヤ主義者だったことは、あまり知られていない。

なので、ヨーロッパの戦争も「米国はヒットラーとうま

くやっていける。戦う必要はない。中立を守るべき」とあちこちで講演して回っていた。

フィリップ・ロスの小説では、ユダヤ人の少年を主人公に、リンドバーグ大統領の下でユダヤ人や移民への差別が始まり、人々が分断されていくファシズムの恐怖と混乱がリアルに描かれている。

そうしてみると、この小説は今読むのが一番面白いかも知れない。つい先ごろ、トランプ大統領は移民の国外追放に「敵性外国人法」を適用すると発表した。太平洋戦争中、日系人が強制収容された悪名高い法律だが、米国は戦後「人権侵害だった」と適用を正式に謝罪している。

ここまで小説とトランプの今が相似形だと、なんだが「次に起こること」が空恐ろしい。現実の世界では、反ユダヤの過激な発言を繰り返すリンドバーグに共和党内部から批判が高まり、彼は立候補できなかつた。

ところで、こうした「米国第一主義、孤立主義」をあつけなくひっくり返した国がある。それはどこか。

トラ・トラ・トラ

そう、日本。1941（昭和16）年12月9日、ハワイの真珠湾を奇襲攻撃した日本だ。不意打ちをくらった米

国は、上院82対0、下院488対1で対日宣戦布告を議決。国民はたちまち一致団結し、分断は一掃された。

さらに日米開戦で、ドイツとイタリアは「日独伊三国協定」の約束に従い、自動的に世界一強敵の米国に対して宣戦布告せざるを得なくなった。驚きの展開。全部、日本がしでかしたことだ。

真珠湾攻撃の知らせを世界の誰より喜んだのが連合国側のチャーチルと蒋介石、というのが皮肉で、「これで勝てる」「わが人生最良の日」と米国参戦を歓迎した。

「半年か1年は暴れてご覧に入れるが」（山本五十六）、後は何とか戦況が有利なうちに講和交渉で切り抜けよう、というまことに日本らしい場当たり的な真珠湾攻撃だったが、もしこれがなかったら「日独伊三国同盟」は発動せず、世界史もずいぶん違ったものになっていたはず。

ヒットラーも、ひよつとしたらスペインの独裁者フランコ總統みたいに米国と手を握り、ベルヒテスガーデンの山荘で天寿を全うしていたかも知れない。

# MONEY! MONEY!

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

開店当初はお店の在庫は新刊が二割だったが、今は四割ほどに増えている。品ぞろえをコントロールできる⇒意図して増やした面と、お客さんからの要望⇒結果として増えた面の両方があり、おかげさまで新刊の売上は伸びている。しかしそうなると「資金繰り」という、小売業にとつては生命線といえる課題がのしかかってくる。

取引のパターンはいくつかあり、直接取引でも委託と買切を選ぶことが多い。委託を選んだのに予想よりたぐきん売れて「買切にしておけば…」と後悔することもあれば、買切で思い切った冊数を仕入れたのに初速が鈍く、「これは自分が売ると決めて仕入れた数だ。時間をかけてきっちり売ろう」と気合を入れ直すこともある。

そして日々の売上と通帳と請求書を並べて、お金のやりくりを算段する。日々のメンタルを保つのも大切な仕事だ。

\*

古書については、買い取る価格も販売価格もこちらが決められるので、新刊とは違うプレッシャーがある。

最近増えているのが、実家の片づけや終活での大口の買取だ。特にご自宅まで伺う場合だと、持ち主の人生を丸ごと預かるような感覚が生じ、自然と背筋が伸びる。

と言いつつ、査定は商人としてシビアに判断して作業を進める。持ち主の方の価値観と「いま売れるかどうか」は大きくズレていることが多いので、買取価格に納得してもらうための説明には細心の注意を払う。

販売価格についても、安すぎても高すぎてもダメで、商品としての価値と、この店で売れるかどうかを考え、十円単位で悩みながら価格を決めていく。

買取作業をしているときは、「なんでも鑑定団」に出演している骨董商、中島誠之助さんの「相場とかけ離れた値段で買い取ったけれど、自分の審美眼を磨き続けるためにその品を戒めとして持ち続けた」というエピソードを頭の隅に置いている。(扱う品物の価格は数桁違うけど)

\*

寄贈して下さる方も、実は意外と多い。お世話になってる愛書家のお二人からは、開店祝いという名目で十箱以上譲っていただいた。また元同僚からも、同じく開店祝いでもカルチャー系雑誌のバックナンバーが大量に届いた。事



前に何の連絡もしてこなかったのが、彼らしくて少し笑ってしまった。

「新聞の記事読みました。応援しています。」と、主に演劇関係の蔵書を送ってこられた西部在住の方には、未だにお会いできていない。

何度か来店された後、「これ差し上げます。」と70〜80年代の現代思想とユリイカのバックナンバーを持ってきて下さった方も。

他にも様々な方から様々な本を譲っていただき、今の売場ができています。

元の持ち主とその本を買う人が実際に会うことはほとんどないけれど、本を通じて人と人をつなげる役割を担えていると思う。

\*

商売として本屋をやっているので、お金の悩みはつきない。というより常に金勘定を考えている。

だが一方で、お金とは違う論理で考え、動くことにも意識を向けている。贈与、互助、近所づきあい、歩いて行ける店での買い物と、店主とのちよつとしたおしゃべり、趣味で作っているフリーペーパー。

店で起こった出会いや出来事が、地域での新たな動きに繋がることもある。

一般的な定義の「雑誌・コミック・実用書が一通り揃っている」とは違う「街の本屋」を模索している。

#### 【参考文献】

『面識経済』 山崎亮 光文社

資本主義社会で人生を楽しむためのコミュニティ論。コミュニティ／コミュニケーション／コモン。

『「みんな」って誰？ 災間と過疎をのびのび生きる』

宮本匠 世界思想社

個人から集団へ、また集団から個人への影響を研究する「グループ・ダイナミクス」を元にした実践。

『鳥取県写真史』 竹氏倫子 鳥取県立公文書館

文化的な活動に、地域の個人や企業がどう関わりどう支えたかが、とても分かりやすく書かれている。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

## 本を作る側から (26)

村瀬謙介

(小取舎)

ヘルメットを買いに津山まで行った。鳥取にもバイク店はいくつかあるのだが、ネットの口コミを見るとどこもパツとしない。知り合いのバイク屋(主に修理屋)に、メットはかぶって決めた方がいいですよと言われたので、山陽側で鳥取から一番近く、尚且つ口コミが良いバイク屋さんで購入したわけである。戻ってきて、知人にヘルメットを買ったと言うと「バイクの免許とったんですね」「いや、これからです」「えー?」というやりとりを何人かとした。驚かれた後に一瞬考えられて、「ああ、それはそうですね」と気付かれる。教習を受けるためには先にヘルメットやグローブなど買わないといけないのだが、一瞬順序が逆だと思ってしまうらしい。

「考えればそうだ」ということを知るアハ体験は楽しい。白熊の毛は白くないとか、雪は白いの思っているが雪自体に色がついているわけではないとか。何の疑いも持たず、深く考えたことのないことを少し思考するだけで気づくこととは山のようにある。離乳食を赤ちゃんに食べさせる時に

気づいたことは、新しい食材を徐々に試していかないといけないが、土日は避けられないけないということ。少し考えれば、もし新食材でアレルギーが出て小児科がお休みだと大変だからという理由に気付く。

四月に第二回目となる「街場の老人によるおでん塾」がこぶし館で開催された。小取舎が事務局となっているのだが、今回はゲストの聞き手役も兼ねて参加した。話し手は多久和利氏。テーマは「本の危機、知の危機、書物の底力」。多久さんは現代仮名遣いを使わない方で(メールも歴史的仮名遣いで徹底されている)、文字の成り立ちから、表現、歴史など相当詳しい。一二月に開催した初回(「民藝」がテーマ)にも客側としてご参加いただき、その中で器の話が出た際、司会の徳永進氏が無茶振りで「器の語源は? はい多久さん」と学校の先生のように聞かれて多久さんがスルスルと答えていらつしやつたのがとても印象的だった。器という字の「口」は、祝詞を載せるものを表し、真ん中の大の文字は元々「犬」であり、つまり神様への生贄のことらしい。多久さんは子供の頃からなんでも疑問に思うことが常であり、国語の授業では先生による明確な回答を得られずボーコットしたこともあったそう。「分かる」とい

う言葉にも疑問を持ち、答えに気付いた学生時代のエピソードも面白かった。

疑問に思い、深く考えることで分かる。しかし、浅く考えることさえしない人も多くなったのではないか。スマートフォンやAIの利便性は脳の外部デバイス以上の使い方になり、思い出すことも考えることもしなくなる。覚えている電話番号も数少ない。というか電話番号の数字を一つ一つ押すこともないのではなから覚える気もない。

はなから？

はなからとはどういう意味だろう。最初から、初めからという意味だろうが、なぜ「はなから？」

ネットも辞書も使わず予想してみよう。鼻先という言葉がある。人間だと頭の先から足のつま先までということになるのだが、魚や一種の動物は鼻が一番の先っぽだ。このことから最初＝鼻から、なのではないだろうか。

答え合わせをしてみよう。はなから、はなからって…

「端から」

調べようと打ち込み変換すると、もう意味を見るまでもなく、その字そのものが答えだった。おいおい、わしや馬鹿か。何が鼻先だ。言葉を扱う出版社としてどうなのだ。夜中に原稿を書いているからという言い訳はしない。手を使って書かなくなった弊害が出ている。

いや、でも一日考えてから答えを知ると忘れないな。

最近「つまらない人はいない」ということにも気付いた。いわゆるモブなんていない。皆、それぞれの得意分野を武器として生きている。犯罪者だって他の人より武器に詳しくあったりするし、政治家は政治の良し悪しを知っておかないとできない。話せば面白い人がこの土地にもたくさんいる。いろんな人に、もっとフォローカスしてみよう。

・小取舎の刊行物

『宇沢弘文「社会を治す」  
社会的共通資本の再解釈』

岩田直樹 著

二〇二四年七月二九日発売



## 意識されない欲望

古賀 啓三

(米国ミシガン州在住)

離れたくなかった世界とよく似たところにたちまち引き込まれ、と、奥泉光の新作『虚史のリズム』を読み始めて得た印象を先号で書いた。

円熟期を迎えた、鼻眞の作家が繰り広げる、安定した予定調和に身を浸す喜び、というものもあることはある。

書かれるものの「臍の緒」は、その作家の実人生と密着している、書かれることを触発するような体験はそういくつもあるわけではなく、同じ「臍の緒」に根付くイメージが繰り返し使いまわされるのは致し方ない、などと同工異曲の擁護さえしている。

老いた親が繰り返し返す、ひとつ話を、元気でいてくれるだけで嬉しい、と喜び、老耄には目を瞑る家族ででもあるかのように。

ところが読み了えてみると、『虚史のリズム』A5版千百ページには衰微のかけらもなかった。それどころか、これまで作品以上に深い感銘を受けたのだが、それを今、

どう言葉にしようか、もがいている。

新しい連載を始めてからは、企図したわけではないが、最近読んだ本のことについて書くことが多い。いや、実態は、最近読んだ本の言葉尻を捉え、「書くこと」について書くことが多い。それは、(1) 昨年末の日本帰国で買い漁つて来た本が手元に潤沢にある、(2) 前回の連載時はまだ働いていて本を読む時間がなかったが、今は時間だけはいくらであるから。か？ 多分

過去数回は外国人の作家の作品について書いているが、生理的には受けつけない翻訳モノを、目を瞑って(だといささか難しいのだが)読むのは、お勉強が目的の場合だけである。しかし、久しぶりに読んだ、尊敬する手練れの日本語使いが、日本語で深く考え、最も相応しい言葉を選んで日本語で書いた(と、これは逆も真であり、フローベールがフランス語で熟考し、これしかないといった仏語で表現したものを、そう簡単に、舐めるように読みたくなる仕方)で他の言語に置換できるわけがないのだが(翻訳モノの限界)作品ではあるが、読み了えたばかりで、総体の大きさと深みの余韻に酔いしれているとき、読み始めて衰耗の兆しと直感された、過去の作品群でも繰り返し返されたモチーフを羅列し、腑分けして、なぜこれらが単なる再生利用ではなく、(集大成的、などというクリシエは使いたくない)

新たな「凄み」を放っているのか、明示することは、この分厚い本をあど幾たびか、読み直すことなしには(僕にとつては)難しい。

「語り得ないもの」に出合い、沈黙するしかない

読書とは本来そういうものらしい。

このところ、翻訳モノの作品について、お勉強したばかりの表層を、「語り散らかして」いるのは、染み渡るような理解に至らぬことの証左でしかないですね

Les Pensees de Toshiyuki Nara は、奈良さんの『本屋のパンセ』の副題、というのか仏題である。本屋という職業は思想したり、思索したりしないので、奈良敏行のパンセという仏題の方が正しい、と思いきや、パンセの内訳は、本屋という「職業からみの思索・思想」ばかりなので、正確を期するなら『書店主奈良敏行のパンセ』であろうか。しかし、よくもこう仕事のことばかり書けるな、とやや呆れる。といいながら、自分が『音信不通』に寄せる文章も、「書くこと」についてはかなりなのだが、僕にとって「書くこと」は職業ではない。

勤め人時代を振り返ってみても、身過ぎ世過ぎの種からは、楽して稼ぎたい、と始終願ってるくらいで、深淵な思索が誘引されたことなどない。皆無とはいえないが、北米人事企画、などという部署に在籍していたので、会社の北

米事業に於ける中・長期的人事制度、などということ、ああでもない、こうでもない、と考えたのは、深謀遠慮、ではあったかもしれないが、「思索」より「搾取」に重きを置いていたと思う(笑)。しかし、この本の終章に「四十二年素人のまま本を並べ続けることができた」とあるのが得心する。

書かれることを触発するような体験はそういくつもあるわけではなく、同じ「臍の緒」に根付くイメージが繰り返して使いまわされるのは致し方ない、というのは、マンネリの擁護にしてもあまりぱっとしないが、理由はよくわからないけれど、そうすることに駆り立てられ、繰り返してしまっていて、いつの間にかそのやり方が身に馴染んでいること、なぜだかわからないがそうしてしまうこと、を奈良語でオブセクションという。

『本屋のパンセ』は奈良語の辞書としても重宝する。奈良さんの『音信不通』の巻頭エッセーを、この本で通して読むと、足掛かりとなる。「見立て」「多孔性」「身の丈」などといったキーワードがフェイズごとに頭れ、それは僕にロッククライマーが使うベグを思わせる。「オブセクション」は、緩やかに定義を変えながら、だが全編に登場する。

## 汽車に乗って

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

週に一回、汽車に乗る。

乗らずに済むなら乗らないが、乗らない訳にはならないから止む無く乗る。

車を運転しないから、鉄道を使うのである。

命知らずの中高生なら、一丁、自転車で、と考えるかも知れぬが、揺籃よりは墓の方が身近になった身としては、事故は起こさぬまでも、身体に良からう筈はないから、やらない。

故に、汽車に乗る。

近頃の汽車は風情がない。

そもそも、一両編成の列車、とは何事であるか。編成とは、複数あるものを、ひとまとめにする謂いではないのか。車両を連ねるから、列車であろう。最低でも、五両は繋げなければ列車を名乗る資格はあるまいと思う。ワンマン列車というも艶消しの上塗りである。そも、この言葉は、バ

スが使い始めたと思う。バスと同列に論ぜらるるは甚だ遺憾である。早晩、ノーマン・カーになるであろうから、一時の堪忍と割り切れれば良いのかも知れぬが。

扱、昔の汽車には風情があったのか、と問われれば、どのみち移動のための道具であるから、お召列車でもない限り、乗り心地よく、居住性も抜群、といったものは期待できない道理である。それでも車両のそこそこ、どこか人の手の跡が忍ばれる部分があった。(以下は記憶だけを頼りに書くので、念の為)床は板張り、ワックスで磨かれており、黒光りしていた。時々、靴底が貼りついたり、揺れたはずみに尻もちを付いたりした日には、悲惨なことになるが、まあ、充分に意を払えばやり過ぎすことはできる。

天井は、まるでロマネスク教会の堂宇のように弧を描いており、乳白色に輝いていた。天井画でも描けば興がある。車内灯は、平たく丸い曇り硝子のシェードに覆われていた。所々には扇風機が付いていて、冬場には、この扇風機に一々被いが掛けられるのであった。

窓は自由に開けられたが、当然のことながら、トンネルに入る時は一斉に閉める。日差しが強い時には、木製の鎧

戸を下ろす。

窓の脇に、小さな、ほんの気持ちばかりでございませうが、といった風情の台が付いており、弁当を使う際には、茶瓶などを、ここに置く。弁当箱を置くだけのスペースはない。ジュースや麦酒をやる者のために、栓抜きが横つちよに付属しているのは利便である。

その真下には、灰皿がある。皿といっても、シガー・ケースを横なりに貼りつけたくらい平べったい金属製である。回転式の蓋が付いていて、使わない時は閉めておく。壁に固定されているから、掃除の際は、簡単に底が外せる仕組みになっている。

室内に入るドアは木製で、真ん中に大きな硝子窓が嵌っている。勿論、手動である。稀に、閉めずに行つてしまふ不心得者がいるが、何、列車が左右に揺れた時に、「自動的」に閉まってくれるから、造作ない。

車内アナウンスのチャイムがある。曲目は、ハイケンスのセレナーデである。戦時中は、「前線へ送る夕(ゆうべ)」のラジオ放送でお馴染みの旋律であった。

識者の言う、ハ氏はオランダの音楽家なるが、同国にお

いては全く知られず、独り日本において知られる已也と。

駅に止まる。

単線だから、頻繁に待ち合わせがある。下手をすると走っている時間より、待っている時間の方が長いのではないかと訝る程である。測つてみようと思つたこともないではないが、果して、待ち時間の方が長かつたらば矢張り業腹であるから、やらぬが神経の安寧であろうと思う。だからやらない。

窓外の風景は、半世紀も経てば大きく変わつていそうなものだが、一度、市街地を離れると、意外な程、其処彼処に昔の風情が残つていて驚かされる。ああ、この温泉場は、祖母と訪れたな。あの坂道を下つて海水浴に行つたのだつたな。

トンネルの数を数えながら、走り去る風景に見入つていた、幼き日の自分が思い起さされ、寂寥の感覆い難し。

# 内坪井町日記

(12)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

四月某日

まだ入学式も済ませていないが、長男は早速学童保育へ登校。うまくやっているといるのだろうか。心配。まだ給食もでないので弁当も持たせないといけない。当面仕事なんか休んで家庭教師してあげていたい。そうもいかずに結局会社へ。

今日は水俣にて営業活動。水俣は父方の祖父の出身地で、こないだまで自分の本籍地でもあった。小さい頃は年一度、親戚たちと海辺の温泉宿に泊まりに行ったものだったが、今日営業で来たような街中には来たことがなく、全然土地勘がない。2件ご挨拶と商談に巡り、八代に戻る。

帰宅後長男に学校はどうだったかと聞くと、楽しかったとのこと。何が楽しかったのか聞くと、トランプだそう。そうかよかったね。

四月某日

菓子工業組合青年部の花見会。日本酒のチェイサーが焼酎の水割りりで、べろべろに酔うが無事に帰宅。

四月十一日

子の入学式。あまり大勢の人と接したくない気分だったのでぼんやりしていたらあつという間に終了。ひとまずおめでとう。

四月某日

下北沢にてライブ。樺三期君というドラマー主催の深夜イベントで、全七バンドのうち、彼がかけてもちしているバンドが三つも出た。彼の演奏はとても素晴らしいのでみなさま是非チェックしてみてください。

僕らの出番は深夜3時だった。眠かったがなんとか乗り切る。若干準備不足だったか。

ライブ前に二十年ほど前にたいへんお世話になったベリスストに邂逅。たいへん世話になったというか一年弱だけベースを習いに行っていた先生で、菊地雅晃さんと言う。月に一度だけ一時間ずつくらいレッスンだったのでもう忘れてるかなと思っただが、うっすら覚えていてくださった。久しぶりに話ができてうれしかった。



四月某日

ライブ翌日に福島出張をねじこんでいた。終演後に東京駅に向かい、ベンチで1時間半くらい眠った後に福島県白河市へと向かう。

前にも書いたことがある先輩の会社にて勉強するのが今回の出張の主眼であった。彼が新しくひらいたカフェや、店舗を見学させてもらい、午後からはみっちり技術指導をしていた。睡眠不足で途中で寝たらどうしようと心配していたがなんとか乗り切った。

一泊して翌日の午前中も実作。工場の方にも親切に指導していただく。たいへん勉強になりました。

昼食に白河ラーメンをこちそうになり、東京に戻り羽田へ。夜の便で熊本に戻る。

四月某日

戻ってすぐ節句や母の日対応で仕事が忙しい。残業がつづく。しかしまたすぐライブがやってくる。次はg o f i s hさんとのツアーマンライブ。準備がでない〜。

四月某日

学童保育を勝手に街角クラブと呼んでいるので、子に「今

日は街角クラブどうだった」とか聞いたときはいつもC I u b e D a E s q u i n a (街角クラブ)のことを思い出してしまう。

そういうわけだから今日はL o B o r g e s が聴きたくなったのでS p o t i f yにて検索してみたがいちばんすきなアルバムである『A V I A L A C T E A』がなかった。ないんだね。しかし聴いたことがなかったライブ盤『T E N I S + C L U B E - A O V I V O N O C I R C O V O A D O R』があったので聴いてみる。泣いた。「T u d o Q u e V o c Podia S e r」をものすごく遅い(と感じた)テンポで演奏していたのだが、その速度もすごくよかった。お客さんが大合唱していたのもうらやましい限り。調べたらこのライブのD V Dも出ているらしいのだが、売り切れている。観たい。

# 『白夜』の『ファースト・キス』

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

坂元裕二・脚本の映画『ファースト・キス』を観た。

坂元氏はテレビドラマの脚本家として知られているが、近年は映画作品の脚本に関わっている。その最初の作品が『花束みたいな恋をした』で、『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』（三宅香帆）でも言及がある。その作品の中で、読書やサブカルなどの趣味を通して近づいていった二人の若者は、次第に仕事によってそれから遠ざかってしまったことで、溝を深めていく。

若いカップルの出会いを描いた作品と対になるように、『ファースト・キス』は、中年夫婦の物語として始まる。彼らの関係が「終わった」ところから。興味関心もライフスタイルも異なる彼らは、夫婦としての関係が冷え切っており、離婚届を出そうとしていた。そこで、夫の急な事故死。しかし、突然妻の方はタイムトラベルに巻き込まれ、自らと出会う直前の若かりし頃の夫と再会する。タイムトラベルというSF的な設定だが、緻密な計算はあまりない。ただ、松たか子演じる妻の懸命さ、やり直しへの執念、そして時々現れるチャーミングさが物語を牽引し、それに対

する松村北斗が柔軟な演技で応える。

いわゆるタイムトラベル物と違うのは、この映画の中では、ちよつとしたすれ違いを直しても、運命は大きく変わらないことが突きつけられることだ。それでも、運命に向かって、前に進むしかない。そうやって決断する人の姿を描いていると感じた。

もし、あのとき、あの橋に行かなければ？ ジャックはあんな思いをせずに済んだかもしれない。

四月、ブレッソン監督による『白夜』を観た。

様々な色の玉の光として映し出される夜のパリ。ジャックは橋の上から飛び降りて、死のうとするマルトに出会う。彼女は、一年後に再会を約束した元の下宿人である恋人を待っている。ジャックの自分の内側とその想像の中にとどまっていた淡々とした世界が、マルトによって開かれ始める。

観客は、ジャックが彼女の名前を呼ぶだけの奇妙なテープを持っていることを知っている。それまでの彼の中には、想像上の女しか存在しなかった。それがどうとう固有名詞を与えられた。アトリエで流したり、バスの中で急に流したり、ベッドの枕の下で流したり。彼の頭の中が彼女でいっぱいになっていき、それは昼間の日常をも侵食していく。しかし、夜になって出会うマルトにとつてのジャックは、

恋人との間を取り持つ人でしかない。

運命の第四夜、ジャックは月を見つめる。マルトは別のものを見つめる。それは決定的な瞬間だった。この映画を観た後には、夜空の月を見ることに小さな悲しみが付きまとうことになるだろう。

ジャックが過去に戻ったとしたら？ それでも、彼はマルトに出会うことを選ぶだろう。そして、彼はありえない現在と未来をテープレコーダーに吹き込んで記録するのだ。あたかも存在した過去のように。

ブレッソンは遺作となつた『ラルジャン』の会見において、このように言つたらしい。(パンフレットより)

「まず、絶望なしに希望はありません。希望が感じられるためには、深く絶望しなければならぬのです。」

映画を観に行く前、「心描室」というイベントに参加した。画家である藤田美希子さんに水彩の似顔絵を描いていただくもので、描かれている間に私は「問診票」に書かれているいくつかの質問に答えを書いていく。

「子どもの頃、好きだった駄菓子は何？」

「自由に夢を見れるとしたら？」

「八十歳のあなたが人生を振り返つた時、何をしましたか？  
たと思いませんか？」

などなど、ちよつと考えないような質問が続く。あれも

これもしていなかったのだとも思い、あれもこれもできるかもしれないと思つた。

できあがつた絵を見た時、自分の顔が少し寂しげに見えた。あるいは、孤独の中で悩みつつ、落ち着いているようにも見える。藤田さんは、私の好きな青色で、湖畔に佇む人、朝の森林の中を風景として想像してください。

その時と同じような顔つきを今もしているか、数週間経つた私にはわからない。時は進んでいくから。同じように見える日常も変わつていってしまうから。

この夏、鳥取から出て、新天地で挑戦することにした。色々な人に残念がられているし、こんなふうにいる周りの人に愛されて応援されることもないかもしれないと思う。それでも、私はその変化を受け入れなければならない。運命に向かわなくてはならない。そのときは、またひとりになるだろう。ただ、私は今希望を感じている。



三浦永理・肖像

# 花

あきの素生

(くうねるめがね)



外に出る機会が増えた。大概運転しているため目の端を流れていくだけだが、とにかく花盛りである。

思えば、職場に忘れられていた椿の枝が、今年最初に愛でた花だったかもしれない。その枝は一輪だけ花を咲かせ、後はつぼみの状態だった。緑の葉はつやつやとしている。捨てるのも忍びなく、花瓶に差していたところ次々と咲き、黄色い花芯が赤によく映えた。

三月、通勤途中に一本だけある梅の花がほころび始めた。一番好きな花は、と聞かれたら、おそらく「梅」と答える。香りが好きだからだが、ごつごつとした枝ぶりど、可憐な五弁の花びらも気に入っている。一輪、また一輪とつぼみが開いて、ゆつくり満開になった。出勤時は職場に向けて

ひたすら歩を進めているし、そもそも人様の家の前でじつと立っているわけにもいかないので、香りを堪能することはなかったが、花々を見上げながら歩き、その下をくぐるのは、ひとときの癒しだった。

梅は少しずつ華やいだ白きを失い、花びらを落としていった。それからほどなくして、何の気なしに職場の窓から外を眺めると、桜がかなり咲いていた。開花した、というニュースを見聞きしたときにはまだまだそんな気配はなかったのに、陽気に誘われて一斉に花開いたのだろう、…でもそれにしても急すぎない？と軽くうろたえた。桜の開花に一度気付くと、いつ散り始めてしまうのかとはらはらしながらの見守り活動が始まるのが常である。ただ見ているだけだが、なるべく長く、桜を見ていたい。早々に華々しく散っていくことがわかって分、惜しむ気持ちが大きい。この気持ちをどう表現したらいいのか、と書いているうち、気づけば在原業平みたいになっている。

世の中に たえて桜の なかりせば

春の心は のどけからまし

三十一文字で表現できるのだなと感嘆する。千年以上前から変わらない感覚にも。

と、そんな風に気を揉んでみても、当然桜は散る。気を

揉んだ割に、桜吹雪も桜のじゅうたんも楽しんでいる。やっぱりのどかな春の心。すべての心配ごとが、ひとひらの桜みたいに舞い散って、過ぎ去ってくれるという希望も感じる。そう信じただけかもしれないが。

散ればこそ いとど桜は めでたけれ

うき世になにか 久しかるべき

ちなみに、華々しくはない梅の花の終わり方も、好ましく思う。

身近な桜が散った後も、出先で桜を目にした。少しばかり寒い地域なのか、ソメイヨシノではない桜(あるいは全然別の花)なのか判然としなかったが、お得な気持ちになった。

一週ごとに、景色は一変する。桜、桜と浮かれていたら、あれよあれよという間に、チューリップ、ハマダイコン、つつじ、もくれん、れんげ、芝桜、藤と、自分が名前を知っている花だけでも大変なにぎわいぶりである。春ってこんなだったつけ、と圧倒されている。

道端もささやかに色づいている。最近では、からすのえんどうが勢いを増している。子どもの頃は、ご多分にもれ

ず豆で笛を作り、ぴーぴー言わせていた。ああいう遊びは、どこで習ったのだろう。今では作り方がまったく思い出せないが、来る春来る春、ぴーぴー言わせていたことだけ覚えていいる。ほかに、れんげの蜜を吸っていたな、とか、しろつめくきの花冠、友だちみたいに上手に作れなかったんだよな、とか、春の野花はひとをノスタルジックな気持ちにさせる。

ある日家に帰ったら、台所で花が咲いていた。不精をして冷蔵庫に入れず、野菜かごに置いていた大根から、にゅうと茎が伸び、白地に紫のアクセントが入ったかわいらしい花をいくつも付けていた。こんなになるまで気づかなかつたとは、と自分に呆れつつ、きれいなものが家の中に存在することにうれしくもなった。根元から切り取り、コップに入れた。大根は煮物にした。

花盛りのこのうらかな春の日々が、もう少し続いてくれることを願う。

奈良敏行十三砂慶明

『町の本屋という物語—定有堂書店の43年』

作品社 本体2200円

46判上製

ISBN 978-4-86793-013-7

発行 2024.2



奈良敏行十三砂慶明編

『本屋のパンセ』 作品社

ISBN9 978-4-86793-073-1

二〇二五年三月五日刊行

本体2200円

「読書室」セッション・イン・鳥取

# 『本屋のパンセ』を届ける、旅の終わりに。

報告：三砂慶明「読書室」主宰

2025年5月11日(日) 午後2時半から 定員20名

参加費300円。

.....

三砂慶明さんと奈良敏行との出会いで『町の本屋という物語』と『本屋のパンセ』

(作品社)が生まれました。

三砂さんは『本屋のパンセ』の置かれた場所を訪ね、トークイベントを重ねます。

神戸 100% 紀伊國屋書店新宿本店 千駄木往来堂書店。

福岡ブックスキューブリ

ツク。広島ブックフェスティバル。芦屋ジュンク堂書店。

本屋「Home」。そして鳥取。

この旅で、三砂さんは何を知らせ、何を受け取ったのでしょうか。

そんなことの報告会です。

5 / 11 sun 14:30-

「読書室」セッション・イン・鳥取

『本屋のパンセ』を届ける、旅の終わりに。

【報告】  
三砂慶明  
（紀伊國屋書店「読書室」主宰）

【会場】  
とびざん文化会館  
（鳥取市南東町101-1）  
第6会議室

【参加費】  
300円

【定員】  
20名

【報告者】ウェブサイト

この報告会はその日の催しです。

# 案内



ドラマメリア (座敷わらし)



定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん (県民) 文化会館



・定有堂教室と太極拳の詳細は左のQRコード参照



定有堂教室案内サイト (@ドラマメリア)

『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階バンフコーナー・森の生活者

・邯鄲堂・上田ビル(ボルゾイレコード)・食堂カルマ

・ SHEEPSHEEP BOOKS (定有堂ビル2階)

・ 定有堂ビル2階「音信不通」編集部



太極拳教室(葉香クラブ)会場 二カ所

毎週 ①水曜 19時半から ②土曜 13時半から

それぞれ会場は 市役所 麒麟スクエア



・ 編集後記：

若桜橋から鯉のぼり達が群れて泳ぐ姿を見られる季節になりました。あれはいつ始まったのだったかな。そして、すでに昼間は半袖で過ごしたい日も。今年の夏も暑くなるのでしょうか。

ドラマメリア (編集長)

『本屋のバンセ』(作品社)を伝える旅を続けた三砂慶明さんの報告会がとりぎん文化会館で、五月十一日にあります。

書評が産経新聞に出ました。四月二十七日。和合亮一さんです。Web版で読めます。ありがとうございました。

奈良敏行 (発行人)